ISSN 1347-3085

日本地衣学会 ニュースレター No.49

Newsletter from the Japanese Society for Lichenology

目　次　会員通信……169
雲南地衣類調査行2005（その１）／原田浩……169

会員通信　From Members

雲南地衣類調査行 2005（その１）

2005 年 1 月 10 日夕刻，昆明空港に降り立った私を王さんはいつもの笑顔で迎えてくれた．2003 年 9 月の調査以来，1 年 4 ヶ月ぶりの再会だった．私が「期待とは違い随分寒い」と言うと，王さんは「少し前まではとても暖かかった」と答えた．この寒さは昆明ではめったにないことなのだそうだ．

今回の訪問の目的は，雲南省から報告された淡水生アナイボゴケ科地衣類の再調査である．前回は主に雲南省の北西部を訪れたので(本誌 33 号他参照)，今回は南部となった（図 2）．特に問題となるのは「Manhao」という地名である．かつて 1910 年代に Handel-Mazzetti がこの地を訪れ，河畔からアナイボゴケ属を採集し，Zahlbruckner (1930) が Symbolae Sinicae で報告していたのだ．

調査地選定について王さんとの事前の相談では，南部はほとんど農地になっていて，良い森林が無いから地衣類調査は難しいと言っていた．Handel-Mazzetti (1927; 英訳版 1996)の紀行文を読むと，Manhao 付近の川，紅河（Honhe）周辺では 1910 年代に既にそのような状況になっていたようである．とにかく過度の期待をしないで，各地を巡ろうということで，王さんの計画に従った．

蔓耗 Manhao へ

1 月 12 日朝 10 時ころ，王さんと私を乗せた Jeep は昆明植物研究所を出発した．ドライバーは前回同様，Fei さんである．笑顔も変わらない．ただ違っていたのは，彼の車が，Toyota の古い車から昨年買ったばかりの Jeep の新車に替わっていたことだった．

図１．蔓耗 Manhao 付近の紅河河畔． 川には赤みがかった濁流が流れ，岩上には地衣類は少ない．斜面はバナナやパイナップル畑になっている場所が多い．

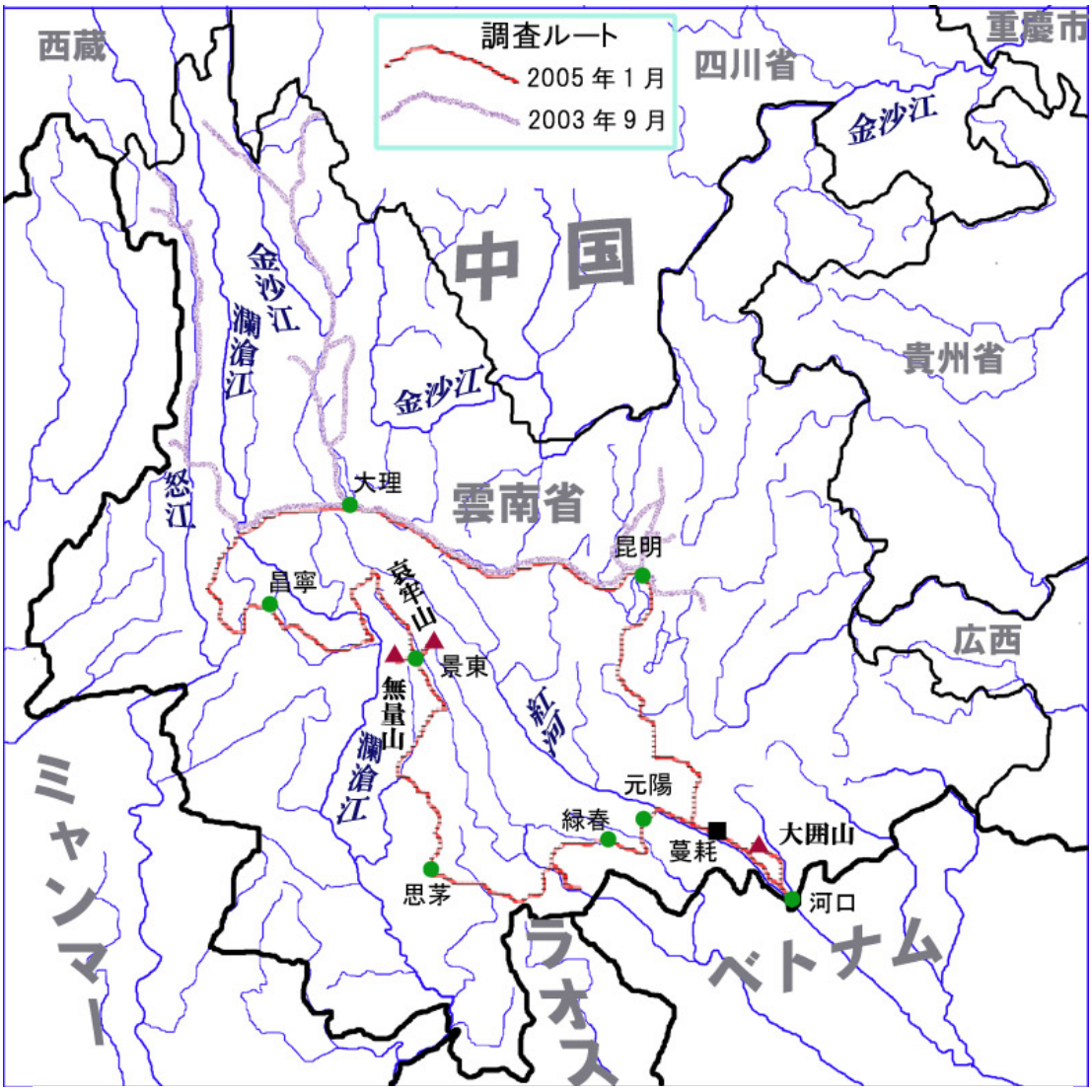

図 2．調査地． 今回（2005 年 1 月）は雲南省の主に南部を，前回（2003 年 9 月）は北西部を主に調査した．

昆明からは昆石高速，石玉高速など高速道路を乗り継ぎ，通海で昼食．午後 3 時ころには紅河 Honhe に沿った道路を南東に下り，蔓耗 Manhao に近づいていた．紅河には名前のとおり，やや赤みがかった黄土色，あるいは黄味がかった煉瓦色の濁り水が流れていた．

手ごろな岩場のある河岸に下りた(図 1)．予想はしていたことだが，岩の上も泥がかぶっていて，地衣類は少ない．しかし，それでも何点かのアナイボゴケ科を得ることができた．流量の少ない河原の土の上には，水面から一定の高さのところにハタケゴケのような苔類が帯を作っているのが印象に残った．翌日は，より下流の地点で同様な調査を行い，更に多くの試料を得ることができた．

前出の Handel-Mazzetti の文献にも関連記事があったが，王さんによると，紅河沿いのこの地域は古くから焼畑が営まれていて，ほとんど斜面全体が農地と化すとともに，自然植生はない．また，少なくとも大型地衣が樹幹上にほとんど見られないのも，このことに関係あると王さんは考えていた．それほどまでに地衣類は少ない．

初日は Manhao に，翌晩は紅河をさらに下った河口 Hekou に宿を取った．河口は，紅河の本流と，そこに北から流れ入る支流，南渓河の合流地点の標高は，雲南

では最も低く 80m未満だという(省都である昆明が約 1800m). 川向こうはベトナムだ. 南渓河にかかる橋を渡って人と物資の行き来が盛んである（図 3）. 事実, 通りに沿った半分露店のような飯屋のほどんどはベトナム人が営んでいた. Handel-Mazzetti が雲南を調査した 1910 年代には既にベトナムの Tonking（現ハノイ）から Hekou, そして Kunming へと鉄道が敷かれていて, 彼らもここを中継していたのだ. 鉄道は河口から紅河を離れ北方へと向かっている.

図3. 河口からベトナム側を望む. この橋は, このすぐ左にある鉄道の鉄橋とともに雲南省の最も重要な交易ルートの要となっている.

紅河沿いには「シルクロード」のような交易の道が古くから開かれていたと王さんから聞いた. 後に帰国前に昆明の書店で, それに関係した書籍も発見した. その道の名は, 茶馬古道. チベットの民が茶を求め馬で往来したことに因む名称であるという. その道は Manhao 付近では川の右岸（南側）を通っているので, Handel-Mazzetti もおそらくそちらの岸でアナイボゴケを採集したのであろう. 現在の幹線道路は左岸（北側）である.

大囲山

河口を後にした我々は, 紅河の支流沿いに鉄道を対岸に見ながら, 大囲山国家公園へと北に向かった. 河口に近い亜熱帯の地ではバナナやパイナップルが栽培され, たまに道端で売っている場所もあった. やがて谷を離れ山を登っていくと, 濃霧に包まれた. こういうこともこの季節には珍しいのだという. やはり異常な寒さと関係あるのだろう. ・・・峠を越え, 屏辺の町に着いた. 昼食後には林道をたどり大囲山山頂付近まで至った. 二次林のため着生する地衣類は面白くないのだという. 淡水生地衣類の住処となる渓流や滝もない. とはいえ, 二次林であってもツノマタゴケモドキ属 *Everniastrum*（これについては後日別の場所で良い写真が得られたので, そのとき紹介する予定）やカブトゴケ属 *Lobaria* が普通に見られるあたりは, ここが雲南であることを実感する. ・・・ここで印象深かった光景を紹介しよう（図 4）. 大囲山を下る途中の山道脇の切通しに, ウラジロとコシダが繁茂していた. ご存知のとおりこのシダ

図4. 大囲山の林道脇にはウラジロとコシダが生えていた. 日本の暖温帯と似ているような, 似ていないような・・・.

図 5．大囲山を下りダムサイトにある公園入り口前にて．かつてない寒さだったという．山頂付近にはうっすらと雪が積もり，樹幹上の地衣類も凍っていた．

は，日本では暖温帯の伐開地などに良く見られる．日本ではウラジロが正月飾りに使われると言うと，王さんは初めて聞いたと言っていた．周りに出現する地衣類はと言うと，比較的安定していると見られる岩上はキゴケ属 *Stereocaulon* で覆われ，不安定な場所はセンニンゴケ属 *Dibaeis* で覆われていた．属はおなじみでも，日本とは種が違うようである．

ともあれ今回のメインイベントとも言える Manhao の調査を真っ先に終了したとあって，その後は余裕を持って調査に当たれることができたのは幸いだった．しかしまだ先は長い．およそ 3000km の行程が待っていた．ここで，この調査旅行を実りあるものにする，心強いパートナーを紹介しておこう．図 5 に写る右側が王さん，左が Fei さんである．そしてその隣が，彼の Jeep．（つづく）

（原田 浩：千葉県立中央博物館）

●複写される方へ
本誌に掲載された著作物を複写したい方は，許諾を受けてください．詳細は本誌42号148ページに．

●Notice about photocopying
In order to photocopy any work from this publication, you or your organization must obtain permission. For details, see No. 42, p. 148 of this publication.

日本地衣学会ニュースレター 49号
発行日：2005年 2月 15日
編集： 原田浩・岡本達哉・木下靖浩・棚橋孝雄
発行者・発行所：日本地衣学会
〒010-0195 秋田市下新城中野
秋田県立大学生物資源科学部生物生産科学科内

©2005 日本地衣学会 （© 2005 The Japanese Society for Lichenology）
本誌記事の著作権は日本地衣学会に属します．無断転載・無断複写等は固くお断りいたします．